

< 2022 年度 ATI 研究助成成果発表会 開催記 >

田口英樹 ATI 研究助成選考委員 (東京工業大学 科学技術創成研究院 教授)



(遠藤理事長)

2022 年度研究助成成果発表会が 5 月 20 日(金)に開催されました。昨年度、一昨年度の成果発表会はコロナ禍により 2 年連続でオンライン開催でしたが、今年度は 3 年ぶりの現地開催を含むハイブリッド開催となりました。事務局によると、新型コロナウイルスの感染拡大状況を開催日の 2 週間ほど前まで見極めた上でのハイブリッド開催ということです。出席者は現地会場の御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンターに 23 名、オンライン 8 名の合計 31 名でした。私は会場参加でしたが、現地参加の人たちが醸す一体感、緊張感などの雰囲気は対面開催ならではのものです。

会は、遠藤理事長の開会挨拶から始まりました。遠藤理事長が壇上でマスクをして話し始めたところ、外していいのでは、という声があがりましたが、結局、感染防止対策のためにマスクを付けたままで話すことになり、ウィズコロナ状況での対面での会議実施の手探りなようすがわかりました(なお、その後も発表者は全てマスクを付けて発表し、マイクは一回一回消毒していました)。続いて、森田選考委員長による研究助成や奨励賞選考経過の紹介と講評があり、続いて奨励賞授賞者への賞状授与、トロフィー及び副賞の贈呈となりました。



(森田選考委員長)



(遠藤理事長よりトロフィー贈呈)



(中島理事よりセイコー腕時計贈呈)

【奨励賞受賞講演】

今年度の奨励賞授賞者は塚本孝政博士(東京工業大学 科学技術創成研究院 助教)で、受賞者の挨拶に引き続き、奨励賞記念講演となりました(座長 渡邊聡)。

・塚本 孝政(東京工業大学 科学技術創成研究院 助教)

「異種元素配合サブナノ粒子の物性・機能に関わる組成効果の解明」

【2020 年度研究助成成果報告】

引き続き、2020 年度研究助成成果報告が行われました(座長 田口英樹)。

・古池 美彦(自然科学研究機構 分子科学研究所 助教)

「時計タンパク質のナノ構造チューニングによる生体リズム精密制御」

・松尾 貞茂(理化学研究所 創発物性科学研究センター 基礎科学特別研究員)

「並列ジョセフソン接合間に流れる非局在超伝導電流の制御」

なお、荒井慧悟(東京工業大学 工学院電気電子系 助教)、関根智仁(山形大学大学院有機材料システム研究科 助教)、村上 慧(関西学院大学 理学部 准教授)の 3 名は日程調整がつかず欠席でした。

【2021 年度研究助成テーマ報告】

休憩を挟んだあと、2021 年度研究助成テーマ報告が行われました(座長 湯浅裕美)。

- ・于 躍(オンライン発表)(産業技術総合研究所 バイオメディカル研究部門 研究員)

「Killing unkillable cancer cells with a light-responsive framework nanocarrier」

- ・小野寺 桃子(東京大学 生産技術研究所 特任助教)

「原子層と MEMS を組み合わせた角度可変型複合原子層構造の実現」

- ・米田 淳(東京工業大学 超スマート社会卓越教育院 特任准教授)

「シリコン電子スピン対の位相反転相関の解明」

- ・樋浦 諭志(北海道大学大学院 情報科学研究院 准教授)

「希薄窒化物半導体を基盤としたスピン選択輸送の開拓」

- ・小嶋 良輔(東京大学大学院 医学研究科 助教)

「新規計測技術による細胞外小胞放出メカニズムの包括的理解」



どの発表に対しても活発な質疑応答があり、時間が足りないほどでした。ほとんどが現地会場での質疑応答でしたが、オンラインでの質問も一部あり、スムーズに行われました。この会の特徴は発表内容がかなり広い分野にまたがることですが、それをみなが楽しんでいることが質疑応答からもわかるのが印象的でした。「全くの素人質問ですが・・・」という質問が、専門の人たちが集まる会場で出てこない本質を鋭く突いていることも多かったように思います。

演者、聴衆共に貴重な異分野交流になっているのは素晴らしい点です。私自身、発表内容の違いのみならず、演者の発表の仕方の個性や所属する研究コミュニティでの常識などを知るのはいへん勉強になりました。

最後に齋藤理一郎選考副委員長・理事による閉会挨拶です。全体の講評として、発表分野は多彩だが、共通するのは、若い研究者が新しいことに挑戦していることである、ということで、筆者も強く同意します。



会議が終わって、記念撮影をしたあと(しゃべらなければということで一時的にマスクを外して撮影)、多くの人は懇談会ということで同じ会場で間隔を十分に取り着席にて会食しました。食後はマスクをしながら少し歓談するようすも見られました。オンラインだとちょっとした雑談や、初対面の人への声かけが難しいということがよく言われます。休憩時間や懇親会で直に話せたの(齋藤選考副委員長)は対面開催の良さの一つとなったと思います。



以上、コロナ禍の中でのハイブリッド開催は多くの実りがありました。初の試みということで事務局の方々はいへんだったと推察いたします。誠にありがとうございました。

後列左より、松尾氏、小野寺氏、
樋浦氏、小島氏、塚本氏
前列左より、米田氏、遠藤理事長、
新庄副理事長、古池氏